

# カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センターたより

秋号  
21年10月  
No.60

## カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター事務局

〒604-8006 京都市中京区河原町三条上ル

発行人／奥村 豊

TEL 075-366-6609 FAX 075-366-6679

E-mail: [bukatu@kyoto.catholic.jp](mailto:bukatu@kyoto.catholic.jp)

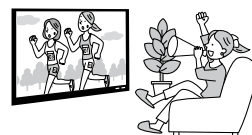
Home Page <http://www.kyoto.catholic.jp/bukatu/>

## なんとなく気になっていること

古屋敷一葉（援助修道会）

これを書いている7月末現在、オリンピックは開催中。開会式のゴタゴタ、新型コロナウイルス感染症拡大および熱中症への恐れなどありつつも、開催中。テレビは一日中継を流し、ニュースはなによりも優先的にオリンピック。どちらかという冬期の競技が好きな私は、もともと夏季オリンピックをあまり見ないのですが、今回はますます見なくなっていました。理由がいくつかあります。

まず、だんだん国を背負って競うということに、気持ちがついていけなくなったのです。スポーツの競い合いで、戦争じゃないからいいじゃないか、と言われるかもしれませんが、どうしてわざわざ国を代表してやる必要があるのかが分からなくなりました。国という枠で人を囲ってしまい、国の優劣を判断する材料としてオリンピックを見ている言葉に敏感になったのかもしれませんが。メダルは個人やチームの選手が獲得したもので、国家が獲得したものではないのではないかと思います。だんだん周りが国粋主義者のように見えてきます。日本はメダル何個取ったとか、どこの国に勝ったとかで、はしゃぐ人々。挙句の果てには、日本が一番という気持ちになるのか、特定の国（国の人）に対して見下したような言葉も出てきたりして、気分が悪くなるのです。言い返すのにも疲れて、他の話題に替えたりしてしまいます。



開会式の最終聖火ランナーはテニス選手の大坂なおみさんだったそうですが、某インターネットサイトのニュースに並んだコメントを見ると、「日本人じゃないじゃん」というものがあります。彼女は日本国籍を選んでいますが。日本人とは何か？日本人でないといけな理由は何なのか？という疑問がわきました。「多様性と調和」が今回のオリンピックのテーマの一つということですが、国という枠で人を見ることは、多様性を認めることと相反することのようにも思えました。国籍というもので人を決めること、どのようなルーツを持つかで人を見ること・・・どれも結局は個人の偏見に左右されるのではないのでしょうか。

さらに、選手個人に対するストーリーがいろいろ出てきます。見た目の品評から始めて、どんな人生を送って来たのか、ゴシップなど。オリンピックはテレビ中継を通して多くの人が「見る」ものですが、選手は「見られる」立場として負うものと実感するようになりました。個人に対するコメントを聞いて、しんどいなと思うことも出てきました。オリンピックに関する報道を見ると、「在日韓国人」「ゲイ」と表記された選手のニュースが出てきます。ニュース自体は好意的に書かれているのですが、よく考えるとそのようにわざわざ書くということは、世間で受け入れられていない存在として認めているということにもなるように思いました。いろんなアイデンティティを持つ人が活躍することはすばらしいと思いますが、一方でその人々への悪意の視線も増えることになります。記事への反応に対して、自分がどう反応するかが問われますが、それもまた心の負担が増えるのです。

どのように「見られる」かということで、私の目を引いたニュースがありました。ドイツの体操の女性の選手団がボディスーツを着て競技に挑んだというのです。少し前から、女性の選手を性的な対象として「見る」層がいるということがとり上げられていました。体の露出が多い競技の選手の写真を撮って、性的なサイトに上げたりするケースもあるということです。今度は国ではなくて別なカテゴリーでの枠づくりだなと思いました。消費する側と消費される側とでも言えるでしょうか。個人をそのように見てしまうという視線そのものが、私にとって心が痛むものになります。オリンピックが一つのイベントになっているので、競技者が競い合うという意味よりも、見る側と見られる側を生み、選手は消費の対象となっていることからこのような問題がでてくるのかもしれない。



「しかし、わたしは言っておく。みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、すでに心の中でその女を犯したのである。」（マタイによる福音書 5 章 28 節）文字通りの意味でもありますが、問われているのは私たちのまなざしだと思います。愛を持って人を見ているのかどうか。その人を見るときに、様々なフィルターを通して見ているとしたら、そのフィルターは何なのか。一日の終わりに祈り、振り返ってみたいと思います。

## イエスを死に追いやったのはだれか

奥村 豊（京都教区司祭）

マルコ福音書の展開ではこうである。

一回目「長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され」（８：３１）

二回目「人々の手に引き渡され、殺され」（９：３１）

三回目「祭司長や律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して異邦人に引き渡す。彼らは・・・殺す」（１０：３３－３４）

一回目のエピソードの直前、イエスに関するうわさに対してペトロは「あなたは、メシアです。」（８：２９）と信仰告白する。ところが３１節からのエピソードでイエスから「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」（８：３３）と咎められる。ペトロは「たとえ、みんながつまずいても、わたしはつまずきません。」（１４：２９）とも言う。これら立派な信仰宣言や離反の否定にも拘わらず、後にペトロはイエスを知らないと言って裏切ることになる。わたしだけは大丈夫、裏切ることはないとその時々では真剣に言いきっているのだったが。

二回目のエピソードにおける加害者は特定の身分を持ったものではなく「人々」に拡大されている。実際イエスが裁かれるとき、それまでエルサレム入場をあれほど盛大に迎えた人々が「十字架につけろ」（１５：１３－１４）と繰り返している。

三回目のエピソードにおける加害者には異邦人が加わっている。これは死刑執行に携わる百人隊長のことだろう。そして、この百人隊長が「本当に、この人は神の子だった」（１５：３９）と言う。明らかに直接的加害者である百人隊長が自覚的に決定的な信仰告白をするのである。ペトロの無自覚な信仰告白とは対照的ではなかろうか。

差別や人権を語るときに忘れてしまいがちなのは、差別者の側に自分が入っているという自覚である。この視点が欠けたとき、偽善が入り込んでくるのだ。日々の祈りの中で回心し続けるしかないのだろう。「この種のものは、祈りによらなければ決して追い出すことはできないのだ」（９：２９）





## #74 "想定外"の人々は...?



※全ての視覚障がい者が点字ユーザーではありませんが...



▽時事ドットコム9月13日より



## #75 状況を変えたい!!



2021 Sep. 14

## #Don't Be Silent～声を上げれば社会は変わる

パウラ貴子（イエスの小さい姉妹会）

### －「森発言問題」という気付け薬

ジェンダー・ギャップ指数（2021 年）世界 156 か国中 120 位という後退国日本において今年の 2 月、森喜朗元東京五輪パラ組織委員会会長の発言、「女性がたくさん入っている理事会は時間がかかる」が多くの女性を炎上させたことは、まだ記憶に新しいと思う。

この発言の際、同席していた人々がその非を指摘せずに、逆に笑っていたということは、この問題の重大さを浮き彫りにした。その後、括弧つきのお詫びにとどまる森さんの謝罪会見、後任指名の不可解なプロセスは世論を迷走させ、国民の感情を逆撫でし続けた。ハッシュタグ「わきまえない女」、「Don't Be Silent」が SNS 界に溢れかえった。

これを書いている私は団塊ジュニア世代である。この一件の渦中で私も、まるで気付け薬を嗅がされたように目が覚めた。自らの怠慢を今までにない危機感とスピードで反省せざるをえなかった。このような男性の発言を放置してきたのは昭和世代の私たちなのである。もし自分の父親が生きていたら言っていただろう発言。そしてそれをなにかあたりまえのようにぼんやり聞きながら育ってきたのだ。さまざまな「差別問題」に関して敏感であったつもりだった。しかし女性差別問題について、これほど自分が眠りこけていたかと驚き、我が身を悔いた。

### － 声を上げれば社会は変わる

そんなかたじけない気持ちでいる私の目の前で、まぶしい光景が広がった。能條桃子さんはじめ多くの若い世代が立ち上がり、16 万筆近い署名を集め、組織委員会に提出したのだ。女性側による多くの議論が行われ<sup>1</sup>、海外メディア、各国の大使館の職員<sup>2</sup>も追い風を送るように応援のエールを発信した。<sup>3</sup> #MeToo<sup>3</sup> でできた素地により、社会がすでに差別問題に敏感であったとはいえ、抗議の声で人事を変えたものとしては、国内としては相当大的きな動きであった。



<sup>1</sup> <https://www.youtube.com/watch?v=gztaP8ymvVs> (Choose Life Project) など参考

<sup>2</sup> 「黙ってないで」 欧州大使館、森さん発言に抗議の投稿か: 日本経済新聞 [nikkei.com](https://www.nikkei.com)

<sup>3</sup> 2006 タラナ・パークが始めたスローガン「Me Too」。後に著名人の性的虐待被害の告白によって大規模化した運動。日本では伊藤詩織が知られている。

この件に関する組織委員会の対応は 100%とは言いがたく、論点はズレ続けてきたものの（そもそも五輪開催そのものが本末転倒であったことは言うまでもない）多くのことが動いたことは特筆に値する。声を上げたら社会が変わっていった、そんな体験がこの国の人々には必要だ。

## － 『「母と息子」の日本論<sup>4</sup>』に見る、女性差別の奥行きの深さ

差別のメカニズムというのは全ての差別問題に共通する。しかしながら女性差別の問題というのはそれ特有の複雑さと奥行きがある。

なぜ男女格差が生まれるのか。品田知美さん（社会学者、早稲田大学総合人文科学研究センター招聘研究員）は著書『「母と息子」の日本論』の中で、その歪みは、社会の圧力の下で苦しむ母と息子の関係からすでに始まっていると述べる。

### 【息子はかわいい？】

「母親にとって息子は特別にかわいい」というのはよく聞く言葉である。母親は息子と安易にカプセル状態に陥る。そうした男性は、幼いままの「ふがいない息子」として大きくなる。不幸にしてその幼稚さから脱することのできなかった多くの男性によって社会が成り立ち、その支配下で女性は、常に母親の代用的な立場を強いられることになる。一方、時代の流れの中で自立に向かう女性たちは、「不機嫌な娘」として母親の従属状態を批判し、男たちの脱ぎっぱなしの靴下を片付ける生活はごめんだと結婚に消極的である。ゆえに結婚も少なく必然的に少子化となる。しかし、その「不機嫌な娘」たちも、いざ結婚するとなれば、従来の「献身する母親であれ」という社会の要求にあらがえず、社会の悪循環に呑み込まれてしまう。

### 【母親に養育を頼る社会の限界】

「家族で助け合うのが当たり前」と、自助から公助に成長できない日本社会は、介護やホームレス支援などの推進に停滞をもたらしているが、母親業にとってもそれは同じだ。社会はどこまでも、与え尽くす母親であることを要求し続ける。同時に母親は不安を感じている。日本の社会制度が機能不全である以上、社会に出たときに男性が負わされる重荷に、はたして我が息子が耐えられるかどうかと。こうして母親は息子のためにあらゆる献身をせざるをえなくなってしまう。

### 【阿闍世コンプレックス～男性は女性を恐れている？】

実際、日本の母親は「グレートマザー」、強い存在だ。しかし、それならばなぜ、女性が男性に仕えるような状況にあるのだろう。それは日本特有の母性社会の深層に隠れたミソジニー（女性嫌悪・女性蔑視）にあると言う。「エディプスコンプレックス」<sup>あじやせ</sup>に對置する、「阿闍世コンプレックス」という、仏典の「涅槃経」の物語からくる概念だ。

---

<sup>4</sup> 品田知美『「母と息子」の日本論』亜紀書房（2020）

阿闍世という女は、夫の気を引こうと、仙人を殺して息子を得る。自らの出生の由来を知った息子は母を殺そうとするが、その罪悪感から悪病に罹る。阿闍世はそんな息子を献身的に看病し、息子はその姿を認めて許す。

この（父親不在の）物語が語る心理的要素は、母と息子の、甘えと相互性という一体感、怨みとマゾヒズム、許しと罪悪感だという。息子たちは母親に呑み込まれることを潜在的に恐れていると。大人の女性を恐れ、幼児性愛に走る男性が多いのも、こういった心理もあるのではと。この「母親殺し」の欲求が暴走した例としては、中世の「魔女狩り」もその一つだという。

母と息子の融合関係と制度不全の社会構造の相互作用による、社会と男性の幼児化とミソジニー。ただ単に男が女がということではなく、総合的に出口の見えない構造があることを品田さんは説明する。

## 一 目覚めていること

こうしたことから、制度の面でも意識の面でも包括的な改革が必要とされる。その男女格差は時に、熱心な反差別運動グループ、ないしフェミニズム運動の団体内部にさえも入り込む<sup>5</sup>。資本主義の問題も絡んでくる。多くの女性が従事するケア労働が正しく評価されていないどころか、搾取されている点など、課題は多岐にわたる。

変化を好まない多くの国民は相変わらず泥のように眠りこけている。しかしその傍らでなにかが動いているし、そこには多くの人の研究、模索、勇気がある。

女性の価値は正しく評価されなくてはならない。コロナ対策に成功している国は、女性がトップの国が主という統計も付け加えておくべきだろう。あきらめという誘惑に屈するべきではない。そしていつか「フェミニスト」という言葉が不要になる時代が来たらいいと願う。

森さんの謝罪会見、後任指名の不可解なプロセスは世論を迷走させ、国民の感情を逆撫でし続けた。ハッシュタグ「わきまえない女」、「Don' t Be Silent」が SNS 界に溢れかえった。

---

<sup>5</sup> 栗田隆子『ぼそぼそ声のフェミニズム』作品社（2019）



大正区沖縄タウン学習会が延期に延期が重なりましたが、引き続き学習会を予定しております。前号の補足を安田耕一さんに書いていただきました。

## 続・沖縄(琉球)と出会うということについて

安田 耕一

沖縄に向かった少女

2000年4月、一人の女性が沖縄に向かった。その1年前、広島県立世羅高校の生徒会長だった彼女たちは、学校側に対して日の丸・君が代のない卒業式を要請していた。卒業式の前日になって校長が自殺した。県教委の圧力に耐えきれずに自死を選んだと考えられる。翌年の卒業式で彼女は卒業生総代となって思いを語った。卒業式の会場には、日の丸が掲げられ、君が代が流れたが卒業生は誰一人歌う者がなかった。

少女は「沖縄に行けば日本がもっと見える」と信じて沖縄の大学へ進学した。「日の丸・君が代」そして「ヒロシマ」を背負った少女は沖縄の地をふんだ。沖縄出身の同級生たちは「控えめでのんびりしていた。高校時代は同級生と平和をテーマによく論議した。そのギャップに『浮いている』と感じた。」という。しかし、没頭したのは演劇仲間との何気ない会話のなかに「みんな心の底ではオキナワを意識している」と気づいたという。

沖縄へいけばみんな反基地で怒りに燃えているという思い込みが私にはあった。1985年、部落解放同盟東京都連青年部の一員として沖縄を訪れたときのことだ。伊江島にある「土の家」で同宿した地元の青年との会話はすれ違った。「戦争だけで沖縄を見て欲しくない」という。もっともな意見だったが、意外な思いも頭をかすめた。会話継続の緒をみつけれないまま気まずい時が流れた。その訪問のおり、私たちは求められるまま米軍嘉手納基地の一坪反戦地主になった。

戦後日本の出発と陥穽

戦後日本の平和運動を象徴したのは被爆体験を「唯一の被爆国」として平和運動の起点としたことだ。明治以来、蝦夷地と琉球の占領と編入。朝鮮と台湾の植民地化。傀儡国家満州国の建国。日中戦争から太平洋戦争へと海外侵略はつづいた。私はこの一連の欧米列強との戦争を「強盗と泥棒の戦い」と位置づけている。国家総動員令によりすべての国民が好むと好まざるとに関わらず侵略戦争に荷担する構図がつけられた。しかし、加害者であるはずの日本は無差別空襲やヒロシマ、ナガサキへの原爆投下で戦争の被害者となってしまった。アジアの無辜の民の死は遠ざけられたかにみえる。はたしてヒロシマ、ナガサキの人たちは、皇軍の南京陥落に歓喜しなかったか。シンガポール陥落で提灯行列をしなかったか。被害だけで語られる平和は、どこかに他者の

苦しみを置き去りにしてしまうように思う。私たちは大きな贖罪を背負ったままにあることに気づく。

#### 日本にとっての沖縄とは

2020年2月、コロナ感染で日本がざわめきだした頃、部落解放・人権研究所の主催による第34回人権啓発集会在沖縄で開催された。沖縄の地元紙は、実行委代表で「部落解放・人権研究所」代表理事の谷川雅彦さんが「社会的差別について共に解決に向けて取り組む認識を共有していきたい」とあいさつしたと報じたが、「部落問題」への言及はなかった。その意味で沖縄ははまだ部落問題と出会っていないと思っている。しかし、関西では沖縄出身者が被差別部落と出会い、結婚して支部活動に参加していく人たちもいると聞く。東京にもそうした出会いをした人がいる。

1960～70年代にかけては大阪・大正区の沖縄出身者の集住地区火災への解放運動団体からの支援の拒否や同和教育副読本「にんげん」への沖縄問題の掲載、配布にかかわって沖縄県人会が抗議した出来事もあった。沖縄の問題は「部落問題と違う」という論旨での掲載も配布も反対だった。反対の声は沖縄現地もまきこんだ。沖縄と被差別部落は確実に出会っていないながら、なぜか痛みを分かち合う機会を生み出せないままに時が流れた。

#### 沖縄にとっての日本とは

1903年の人類館事件では「アイヌや台湾の生蕃と同列にするな」という文脈で抗議がされた。1911(明治44)年に起きた河上肇講演(舌禍)事件も方言撲滅運動における柳宗悦らの同情的発言も同化推進の立場からの抗議だった。文学では1932(昭和7)年「滅び行く琉球女の手記」に描かれた積極的同化推進での悲劇についてもインテリ青年らが「旧慣を書く必要はない」と同郷作家を糾弾する事件が起きた。沖縄は国を失った被抑圧民族の悲哀のなかでアイデンティティーの形成に苦慮してきたといえる。いつまでたっても「日本人」になれず、異民族視されつつける憤りが垣間見られる。

太平洋戦争における地上戦と米軍統治をへて72年に「復帰」した沖縄は、未だに軍事植民地として留め置かれたままにある。2016年には、大阪府警機動隊が基地建設に反対する人たちに「土人」と言う言葉をなげつけた。いま、沖縄は民衆自身による歴史を必要としているのではないか。盗掘された遺骨返還の取り組みにみられるように、その底流にはつねに琉球民族としての情念がくすぶりつづけていることに深く留意する必要がある。私たちはいったい沖縄の何に連帯するのか問われている。大阪市大正区のクブングアとは、琉球王国の消滅以来、沖縄そのものがたどった歴史が日本の一隅で交叉した場所だったと思っている。(了)



## 転び（キリシタン）の系譜、出会い直しの「旅」 4

### 浦上四番崩れの和歌山流配

深堀安希子（和歌山 紀北教会）

#### 〈はじめに〉

1868 年(明治元年)、大量の隠れキリシタンが発覚した長崎・浦上村のキリシタン 3394 人が、20 藩 22 ケ所に流配されます(浦上四番崩れ)。カトリック教会の中でこの事件を捉える時、厳しい迫害に耐え信仰を守り抜いたという側面には光が当たりますが、ここではもう一方の側面「旅」に出なかった(一斉検挙を何らかの理由で逃れた)人や、「旅」の途中で棄教した人、脱走した人たちの生きた姿も追って行きます。

また、流配者を預からざるをえなかった各藩の人々の様子と、捕縛役・牢番の役割を担った被差別部落の人々のことにも光を当てることが出来ればと思います。明治維新直後、疲弊していただろう各藩に、罪人として流配されてきたキリシタンは‘やっかい者’だったことでしょう。その様な‘よく分からない’、‘異質な存在’であるキリシタンを、混乱期に預かるという状況の中で、地域によっては人道的に扱われた流配者たちもいたことは、現代の私たちが探求する‘共通善’のヒントともなるのではないのでしょうか。

#### 〈和歌山流配の概要〉

和歌山へは、戸主組 75 人、家族組 190 人、寺仲間 16 名が送致されてきました。1869 年(明治 2 年)12 月から 1 月にかけて順次到着し、ひとまずお寺へ預けられ、その後、和歌山県下各地へと分散して預けられます。1870 年(明治 3 年)6 月下旬に再度、和歌山に集められてからは、15 才以上で働ける者は使役され、それに耐えない老人、幼児連れ等は馬小屋に収容されたようです。1871 年(明治 4 年)以降は、待遇が改善し、労役者と馬小屋収容者は共に居住条件の良い場所「デンポの長屋」に移されており、改心(棄教)した者は市中に居住し仕事を得ていたようです。そして明治 5 年に改心者が、明治 6 年 2 月には不改心者も長崎への帰郷を許されました。数字だけを見ますと、和歌山流配者の死亡率は諸藩中ワースト 1 位(33.8%)となっています。何故このような結果になってしまったのでしょうか。死亡者の多くは和歌山に再集合した後、労役に向かない人たちが収容されたという馬小屋で亡くなっています。そこでは食糧事情が悪かった上に、洪水の後に疫病が蔓延したことで多数の死者が出たようです。この時のことを記した体験記は(私の知る限りでは)3 つあり、浦上天主堂保管の「サダの覚書」(※ 1)と、某所ホームページに記載されている「6 才で和歌山に流配された祖母から聞いた話」(※ 2)、そしてパリ外国宣教会の宣教師宛に送られた「ワサの書簡」(※ 3)です。更に、幾人もの証言を聴き取り肉付けしたという浦川和三郎著『旅の話』(※ 4)は、馬小屋を含む流配時の体験記となっています。

### 〈キリシタンと被差別部落の人々のこと〉

キリシタンを収容する牢獄の牢番として被差別部落の人々が役割を担った事例は、和歌山藩でもあり、政府文書である太政官の通達文書や、政府通達文書の写しである和歌山藩内の文書では、「カワタ村」の人々に流配者たちの世話や監視を担わせる指示が見られます。また、キリスト教側の資料では、特に『旅の話』における上記、馬小屋での該当箇所、賄係と埋葬係を担った‘非人’の人々への敵意の表現、労役で草鞋や畚ふこを作った時のことで「非人と言われたくないという人もいた」という忌避意識的な証言が見られます。これらのキリスト教側の資料にある差別的な表現は、人間の尊厳に反するもので残念であるとはしか言いようがないのですが、では、該当箇所を消せば良いというわけではないとも思います。記載を消すことによって歴史の中で生きてきた大切な存在である被差別の人々自体の記録が消えることになってはいけなからです。キリシタン側の資料にある、その様な表現は誤りであると認めた上で、人間の弱さと社会の在り方への学びとして、後世の私たちが継ぐべき課題としたいことを、補足させていただきたいと思います。

### 〈居留地の宣教師と流配者との接触〉

次に、神戸と大坂・川口にあった居留地の教会での、宣教師と流配者との接触について触れておきたいと思います。1868年、神戸、大坂も開港し、外国人居留地が形成されて行きます。カトリック教会では、パリ外国宣教会のフランス人宣教師たちが訪れ、神戸と川口(大阪)居留地にはそれぞれ天主堂が建てられました。禁教令の最中、建前上は外国人向けの教会としながらも日本人信徒との交流をしていたようで、流配者たちも居留地に神父がいることを周知し、幾人かの人々は居留地を訪れ、宣教師と手紙のやり取りなどもしていました。和歌山への流配者の一人、おワサさんは、同郷出身で検挙を逃れ、たまたま和歌山に来ていた庄三郎さんを通して、宣教師らに時々、自分たちの様子を書いた手紙を届けていました。(※5) また、和歌山から数名で神戸の教会を訪れ、うち1人は和歌山には戻らず司祭館で暮らしていたというようなこともあったようで、当時、教会に居住していたムニクウ神父が、同僚の宣教師へ送った手紙によると「紀州から数人の流刑者が来た。1人は捕囚生活に戻らず、司祭館においでいる。逃亡したのは3ヶ月前で、追跡されていない。」(※6)とあり、和歌山から脱走してきた誰かが、神戸の教会で匿われていたことを伺い知ることが出来ます。ムニクウ神父の後任であるビリオン神父の日記にも、和歌山流配者からのものと思われる手紙が教会の庭に投げ込まれたこと(※7)や、流配者らが商品運搬の漁船で来て聖体拝領し、ロザリオやメダイを持って帰ったこと(※8)が書かれています。こういった流配先からの居留地の教会への手紙や訪問は、他藩流配者にも見られ、その多くは1871年以降の監視が緩やかになってからのようです。手紙については、上記おワサさんが人に言伝えた件、教会の庭に投げ入れた件の他、肉屋を介したというものもありました。交通手段については、徒歩で来たという人もあれば、漁船に乗って来たという人もあるなど、周辺の生活する人々に紛れた様子も興味深いです。



### 〈改宗者の暮らし〉

では、改宗者はどのように暮らしていたのでしょうか。それらの証言は少なく、和歌山では城下に居住していた改宗者のための薬代を某人が請求している記録があることから、街中で居住し仕事を得ていた様子を思い浮かべることが出来ます。和歌山での改宗者の一人である深堀善次郎は、長崎への帰郷が許されて後、11年後の明治16年に母の墓碑を建立しています。この善次郎さんが和歌山に居残ったのか、一度帰郷し再び戻ってきたのかは分かりません。しかし、流配者の誰かが和歌山の地に留まったと思われる記録を見ることができます。ハリストス正教会の「浪華正教」(※9)には、「和歌山に居残った浦上キリシタンのバテレンの善さんが近年まで毛萱町(※10)で存命していた。」とある他、『パリ外国宣教会年次報告』(※11)には「……我らの兄弟は1870年の流刑者たちの中の生存者の一人と和歌山で出会う慰めを得たが、彼は南方の信者たちが流刑より放免された時代に、この地方に留まり住んだのである。それで彼は旧世代の信者たちを結ぶ役を果たすだろう。……」とあり、その様な境遇の人が、和歌山で人々と交わり暮らしたであろうことも、心に留めておきたいと思います。

### 〈さいごに〉

あるお寺の住職さんは、「かつての住職はみんなが嫌がるキリシタンの埋葬をした」という、良い意味での認識を持っておられたそうです。そのお寺は、戦後、教会がしばらく忘れていた間も四番崩れの記念碑を守ってくれており、今も立て看板で紹介してくれています。そして、今回、言及することが出来ませんでした和歌山県のより広域でのこと、有田郡山間部や奥熊野郡には、預けられたキリシタンに人道的に対応したことを示す当時の記録も残っています。一重に「キリシタン流配事件」と言っても、周囲との関わりを見ることで、その印象は随分と変わってくるものだと思います。また、江戸時代の長きに渡る間、捕縛・監視する側とされる側という立場に置かれてきたキリシタンと被差別部落の人々との関わりが、この時、再び顕著な形で表されることになったとしても、後世の私たちは、その記憶を機に良い出会い直しのきっかけとすることが出来るでしょう。江戸時代に弾圧を受けたキリシタンたちが徐々に追い詰められ身を隠した場所はどこだったのか。転んだキリシタンとその類族らが担った仕事は何だったのか。その繋がりの中で見えてくることを大切にしたいと思っています。浦上四番崩れの和歌山流配について、まだまだ私たちの知見が及ばないことばかりですが、これからも探求を続けていきたいと思っています。

### 〈引用・参考文献〉

※1 和歌山県史編纂委員会編『和歌山県史・近現代史料四』(518～520頁)より「サダの覚書」

※2 ナガジン(長崎Webマガジン)「浦上カトリック信徒と聖地巡礼」より。

※3 ・ショファイユの幼きイエズス修道会(訳)「七つの御悲しみの聖母天主堂創立者パリ外国宣教会宣教師ビエール・ムニクー師と同僚宣教師の書簡：1868年7月 - 1871年10月神戸における日本再宣教」より1871年10月14日の書簡。

・浦川和三郎著『浦上切支丹史』(336 頁)より「ワサの書面」。

※4 浦川和三郎著『浦上切支丹史』より「旅の話」。

※5 ペトロ庄三郎の手紙(浦川和三郎著『浦上切支丹史』、三俣俊二著『和歌山・名古屋に流されたキリシタン』に記載有り。原典はビリオン神父の日記である『宣教五十年』より。)

※6 ショファイユの幼きイエズス修道会(訳)「七つの御悲しみの聖母天主堂創立者パリ外国宣教会宣教師ピエール・ムニクー師と同僚宣教師の書簡: 1868 年 7 月 - 1871 年 10 月神戸における日本再宣教」より 1870 年 12 月 15 日の書簡。

※7,8 池田敏夫著『ビリオン神父』(109、110 頁)

※9 ハリストス正教会西日本管区「浪華正教」(1929 年)の浦上切支丹流配に関する連載記事をいただき感謝申し上げます。

※10 和歌山に「毛萱町」という地名はなく、類似する名称で該当地を検討中です。

※11 松村菅和/女子カルメル修道会=共訳『パリ外国宣教会年次報告 1』

## 部落差別人権活動センター今後の予定

**2022 年 2 月 23 日 対話集会 冬枯れの光景Ⅱ**

発題者: 谷元昭信さん

会 場: サクラファミリア

**2022 年 3 月 26 日 大阪大正区沖縄タウンフィールドワーク**

案 内: 安田耕一さん

会 場: なみはや教会

**2022 年 6 月 11 日 水平社 100 周年記念シンポジウム**



コーディネーター: 松浦吾郎司教さん

シンポジスト: 朝治武さん(大阪人権博物館館長)

シンポジスト: 駒井忠之さん(水平社博物館館長)

会 場: サクラファミリア